

附してあり、そうして文書はそこで切れて居るのであるから、これをそのまま地名と解することは前にもいふたやうに決して無理ではないのであるが、要するにこの文書と照合すれば誤讀たることを認めねばならぬ。

さて然らば *solmī, sulmī* といふ地名は何處を指したものであらうか。勿論 Müller 氏の考へた Čerčen と考ふべき理由はない。余の知るところではこれに相當せしめ得る名はまた初めて元史に現はれて来る。元史卷百二十四 哈刺亦哈赤北魯傳に

哈刺亦哈赤北魯畏兀人也。性聰敏習事。國王月仙帖木兒亦都護聞其名、自唆里迷國徵爲斷事官。……從帝太祖西征、至別失八里東獨山。見城空無人。帝問此何城也。對曰、獨山城。往歲大飢。民皆流移之它所。然此地當北來要衝。宜耕種以爲備。臣昔在唆里迷國。時有戶六十。願移居此。帝曰善。遣月朶失野訥、佩金符往取之。父子皆留居焉。

と見える。唆里迷は三字共に元代外國語を寫すに普通に用ゐられた文字で、これが *solmī, sulmī* を寫すに適當であることは他の譯語例からも容易に證據だてることが出来る。此の地が何處に在つたかについては今判然定めるを得ないが、こゝに引いたやうに、成吉思汗の征西時代を遡ること近い時代に當つて、僅かに戸六十を算へる位の地に過ぎなかつたとすれば、もとより當時有名な場所であつたとは思はれない。新疆圖志卷二 には、奇臺縣の條に元史のこの記事を要約して引き、唆里迷を誤つて唆迷と記し、註して「即賽里木」といふてあるが、別に何等の據を示してゐない。賽里木は *Sairam* の音に對する字で、唆里迷とは音聲上に少からず相違があり、直ちに之に對せしめ得る程適當の字面とは考へ得られない。こゝに記されるやうに別失八里の東の獨山城、即ち唐書地理志卷四 に北庭